

はじめに

本テキストは、皆さんが無理なく基本をマスターし、かつ応用力を養成できるように編集してあります。

古典の講は、まず古典文法を重点的に復習した後に文章を通して知識を定着させる、という構成になっています。

現代文の講は、論述的文章と文学的文章をとり上げ、文章形式に応じた解法を習得できるようにになっています。

本書が有意義に活用されることを願っています。

構成と活用法

本テキストは、次のように構成されています。

▼**基本事項** 各単元のポイントを、簡潔な説明で示しています。

▼**プラスα** 基本事項に盛り込めなかった重要事項も示してあります。

▼**例題** 古典では基本事項で学んだ作品を、現代文では各分野の典型的な文章を掲載しています。

▼**演習問題** 基礎力の再確認と応用力の養成を目的としています。古典に関しては、設問の下にヒントや重要古語を掲載しています。

❖ もくじ — 高2国語

1	古典(1) — 古典文法総合	2
2	古典(2) — 物語・日記	8
3	古典(3) — 随筆	14
4	現代文の読解(1) — 論述的文章1	20
5	現代文の読解(2) — 論述的文章2	26
6	現代文の読解(3) — 文学的文章	32
	付録 — 文語文法要覧	38

基本事項

1 動詞・形容詞・形容動詞の活用

動詞

形容詞

形容動詞

2 接続から見た主要助動詞のまとめ

(4)	連体形	+	なり (形容動詞型)	断定	○断定や比喩・例示の助動詞。
			ごとし (形容詞型)	比況	
(3)	終止形	+	なり (ラ変型)	(根拠のある)	○主に確信の強い推量や根拠のある推定などを表す助動詞。 *ラ変型活用語には「連体形 + 上記の助動詞」の形になる。
			めり (ラ変型)	(視覚による)	
			まじ (形容詞型)	打消推量	
			べし (形容詞型)	推量	
(2)	連用形	+	らむ (四段型)	現在推量	○主に過去のこと・実現したことなどを表す助動詞。
			たし (形容詞型)	願望	
			けむ (けん) (四段型)	過去推量	
			たり (ラ変型)	完了・存続	
(1)	未然形	+	す・さす・しむ (下二段型)	使役・尊敬	○主に未来のこと・実現していないこと・実現しなかったことなどを表す助動詞。
			き (特殊型)	過去	
			けり (ラ変型)	過去	
			つ (下二段型)	完了・強意	
		+	ぬ (ナ変型)	完了・強意	
			たり (ラ変型)	過去推量	
			けむ (けん) (四段型)	願望	
			まほし (形容詞型)	願望	
		+	る・らる (下二段型)	受身・尊敬・自発・可能	
			す・さす・しむ (下二段型)	使役・尊敬	
			き (特殊型)	過去	
			けり (ラ変型)	過去	
		+	む (ん) (四段型)	打消	
			むず (んず) (サ変型)	推量・意志	
			じ (特殊型)	打消推量	
			まし (特殊型)	反実仮想	
		+	まほし (形容詞型)	願望	
			る・らる (下二段型)	受身・尊敬・自発・可能	
			す・さす・しむ (下二段型)	使役・尊敬	
			き (特殊型)	過去	

四段 鳴く・咲く・待つ・思ふ・読む・知るナド
 二段 (上二/下二) 恋ふ・老ゆナド/覚ゆ・聞こゆ・得・経ナド
 一段 (上一/下) 着る・見る・似る・煮る・射る・鏝る・居る・率る・干るナド/蹴る
 変格 (力変/サ変/ナ変/ラ変) 来/す・おはす/死ぬ・往ぬ/あり・居り・侍り・いますがり
 ク活用・シク活用 (ともに基本活用と補助活用がある)
 ナリ活用・タリ活用 (それぞれ連用形に「ーに」「ーと」がある)

ポイント

- 1 名詞・動詞・形容詞・形容動詞は文意を取るとき最も重要な語となる。
動詞・形容詞・形容動詞の活用は身に付けておくこと。その理由は、二つある。
① 何形に接続しているかで、下に来る単語の識別をする場合がある。
② 助動詞の活用を覚えるときにも動詞・形容詞・形容動詞の活用のパターンを使う。
助動詞を、どの活用形のあとに来る性質を持っているかによってまとめてみると、助動詞の意味の傾向がわかり、意味と接続の関係がとらえやすくなる。
- 2 「る」「す」は四段・ナ変・ラ変の未然形にだけ付く。この二語は、「ア段」の語に付く性質を持つ。
③ 終止形接続の助動詞は、原則として「ウ段」の語に付く性質を持つ。
④ この「なり」「ごとし」は、「名詞+なり/ごとし」「助詞+なり/ごとし」となることもある。
⑤ サ変・四段の命令形に接続するという説もある。助動詞「り」は「エ段」の語に付く性質を持つ。
- 3 それぞれの助動詞の意味は代表的なものを挙げてある。これらはきちんと身に付けておこう。

(5) **サ変の未然形** たり (ラ変型) 完了・存続
四段の已然形

3 接続から見た主な助詞 (係助詞を除く)

(1) **未然形** +
 ば (もし) ならば。順接の仮定条件を表す接続助詞)
 で (もし) しないで。打消の接続助詞)
 なむ (もし) してほしい。〜してくれろといいなあ。他者への願望を表す終助詞。「あつらえの終助詞」とも)
 ばや (〜) たいなあ。自己の願望の終助詞)

(2) **連用形** +
 て (〜) して。〜の状態。単純な接続・順接の確定条件の接続助詞)
 ながら (〜) しながら。〜ながらも。二つの動作の並行・逆接の確定条件を表す接続助詞。形容詞・形容動詞は語幹に接続)

(3) **終止形** +
 と・とも (〜) するとしても。逆接の仮定条件を表す接続助詞。形容詞・打消「ず」には連用形に接続)
 が (〜) が。〜で。〜の。格助詞 / 〜けれど。〜ので。〜すると。逆接の確定条件・単純な接続を表す接続助詞)

(4) **連体形** +
 を。に (〜) を。〜に。格助詞 / 〜けれど。〜すると。単純な接続・順接の確定条件・逆接の確定条件を表す接続助詞)

(5) **已然形** +
 ば (〜) ので。〜から。〜すると。順接の確定条件を表す接続助詞)
 ど・ども (〜) けれど。〜が。逆接の確定条件を表す接続助詞)

(6) **文末** +
 かし (〜) よ。念を押す終助詞)
 よ (〜) よ。詠嘆・呼びかけの終助詞)

4 係助詞 (係り結び)
 こそ → 已然形
 ぞ → 連体形
 なむ
 や・やは
 か・かは

5 注意する副助詞
 (1) 最小限の限定「せめて〜だけでも。〜だけでも」(最小限の願望や命令の内容を表す)
 (2) 類推「〜さえ」(「Aでさえ〜だ、ましてBは〜だ」と、AをとりあげBを類推させる)

6 呼応する副詞
 「え〜打消」〜することができない / 「さらに〜打消」まったく〜ない / 「いつしか〜願望」早く〜したい・してほしい / 「な〜そ」どうか〜しないでくれナド

(4) 格助詞「が」「の」が、「〜で」の意味になるのは同格の用法のとき。

(6) 「かし」「よ」は、文末に付くのが基本。そのため命令形以外の活用形で終わる文末にも付く。

4 係助詞(係り結び)に関する注意
 ▽「やは」「かは」は、「や」「か」に他との区別・強意の係助詞「は」を加えた連語。

▽強意⇨現代語に対応する助詞がないため無理に訳す必要はない。副詞「まさに」「ちょうど」などを使って強調を表す時もある。

▽疑問⇨「〜か」疑い・問いかけ
 ▽反語⇨「〜か、いや〜ではない」強い打消の意味(または、「〜ないか、いや〜する」
 確に文意をつかむことが大事。

▽結びの省略⇨結びに当たる箇所が省略されている場合をいう。

▽結びの流れ(消去・消失とも)⇨係り結びが成立していない場合をいう。

5 副助詞は、特別な意味を添えるので解釈のとき重要になる。およその程度や限定の意味を添える「ばかり」「のみ」も副助詞。また、識別で間違つてはならない語として、上の語を強める強意の「し」「しも」(これは無理に訳さなくてもよい助詞)などがある。

6 呼応の副詞は特別な意味で使われることが多い。確実に訳せるようにしておくことが大事。

1 次の各文を読んで、後の設問に答えよ。

(1) 男は、「この女をこそ得^Aめ」と思ふ。(「伊勢物語」)

(2) なげきつつ一人寝^B夜(「蜻蛉日記」)

(3) 待つ人はさはりありて、頼^Cめぬ人は来^Dり、頼みたる方の事は違ひて、思ひよらぬ道ばかりはかなひぬ。(「徒然草」)

問 傍線部A～Dに関して、後の設問に答えよ。

A 活用させ、ひらがなで答えよ。

B 平安時代の文法にのっとった適切な形に直し、ひらがなで答えよ。

C 傍線部に含まれる動詞の活用の種類を答えよ。また、傍線部を現代語訳せよ。

D 傍線部に含まれる動詞の活用の種類を答えよ。

A [] . . . []
 B []
 C [] []
 D [] []

2 次の【Ⅰ】～【Ⅲ】は「枕草子」のいくつかの章段のうちから抜き出したものである。よく読んで、後の設問に答えよ。

【Ⅰ】 あはれなることなど、人の言ひ出で、うち泣きなどするに、げ^①にいとあはれなりなど聞きながら、涙のつと出で来ぬ、いとA。泣き顔つくり、けしき異^②になせど、いとかひなし。めでたきことを見聞くには、まづただ出で来にぞ出で来る。

【Ⅱ】 をかしげなる児^③の、あからさまにいたきて遊ばしうつくしむほどに、かいつきて寝たる、いとB。

【Ⅲ】 遠き所はさらなり、おなじ都のうちながらも隔たりて、身にやむごとなく思ふ人のなやむを聞きて、いかにいかにと、おぼつかなきことをなげくに、おこたりたるよし、消息^④聞くも、いとC。

1 単語

▽「得」「経」「寝」「来」「す」は、終止形が単音節であることに注意。

▽「立つ」「頼む」などのように終止形は同じでも、四段活用と下二段活用の二つの活用を持つ語がある。それぞれ意味が違う。

●立つ 四段 立つ(自動詞)
 下二段 立てる(他動詞)

●慰む 四段 和む・ホツとする(自動詞)
 下二段 和ませる(他動詞)

●生く 四段 生きる(自動詞)
 上二段 生かす(他動詞)
 下二段 生かす(他動詞)

中でも「頼む」の下二段は特殊な意味。

●頼む 四段 あてにする(他動詞)
 下二段 あてにさせる(他動詞)

2 重要古語

◇つと＝さつと。すぐに。

◇出で来にぞ出で来る＝現代語の「泣きに泣く」と同じ語法。同じ動詞を「に」で重ね、「ひどくくする」「たいそうくする」の意となる。

◇うつくしむ＝「愛しむ」で、かわいがる。

◇かいつきて＝しがみついて。

◇なやむ＝具合が悪くなる。病気になる。

ヒント

問一 副詞・形容詞・形容動詞などの意味。

問一 傍線部①～⑦の意味として最も適切なものを、下のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- | | | | | | | | |
|---|--------|---|----------|---|-----------|---|---------|
| ① | げに | ア | 非常に | イ | 本当は | ウ | なるほど |
| ② | めでたき | 工 | 現実に | オ | おそらく | ウ | 悲しい |
| ③ | をかしげなる | ア | 祝福するべき | イ | 心苦しい | ウ | おとなしい |
| ④ | あからさまに | 工 | 意外な | オ | 素晴らしい | ウ | しつかりと |
| ⑤ | さらなり | ア | 変な様子の | イ | 趣のある | ウ | 別として |
| ⑥ | おぼつかなき | 工 | かわいい様子の | オ | やんちゃそうな | ウ | 取るに足りない |
| ⑦ | おこたりたる | ア | あてにならない | イ | 気がかりな | ウ | おわびを言った |
| | | 工 | どうしようもない | オ | 気の毒な | ウ | |
| | | ア | 怒っている | イ | 亡くなってしまった | ウ | |
| | | 工 | 快癒した | オ | 怠けている | ウ | |

問二 A～Cに入れるのに最も適切なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|-------|---|------|---|------|
| ア | ゆかし | イ | うれし | ウ | はしたなし | エ | らうたし | オ | 心にくし |
| | | | | | A | | B | | C |

③ 次の各文(1)～(5)の現代語訳として適切なものを、ア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- | | | | | | | | | | |
|-----|-------------|-----|---------------|-----|--------|-----|--------|-----|--------|
| (1) | 花咲くらむ。 | (2) | 花咲きぬ。 | (3) | 花咲くめり。 | (4) | 花咲くべし。 | (5) | 花咲くまじ。 |
| ア | 花は咲くにちがいない。 | イ | 花は今頃咲いているだろう。 | ウ | 花が咲いた。 | | | | |
| 工 | 花は咲かないだろう。 | オ | 花が咲くように見える。 | | | | | | |

① 「げに」は副詞で「実に」とも書く。

② 「めでたし」は古今異義語。

③ 「……げなる」の形は形容動詞の特徴。

④ 「あからさまに」は形容動詞「あからさまなり」の連用形。

⑤ 「さらなり」で「言ふもさらなり」の意味になる。

⑥ 「おぼつかなし」の「おほ」は、「おほる月夜」の「おほ」と同語源。

⑦ 動詞「おこたる」は、病気に關して使うとき意外な意味となる。

問二 形容詞の空欄補充問題。

A 「涙がさつと出てこない」ことが、「いとA」と言っていることに注目する。
 B 「をかしげなる兎」が「しがみついて寝た」のが、「いとB」と言うのである。

C 「病人が、『おこたりたる』ことを手紙で聞いたのも『いとC』』と言っていることに注目する。

③

UNIT

基本助動詞の意味。

(1) 「らむ」の基本の意味を考える。

(2) 連用形接続の「ぬ」は完了の意味を表す。

(3) 終止形接続の「めり」「なり」は推定の意味を表す。

(4) 「べし」は確信の強い推量の意を表す。

(5) 「まじ」は「べし」に打消の意味を加えた打消推量の意味になる。

1 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拝まざりければ、心憂くおほえて、ある時思ひ立ちて、ただ一人徒歩より詣でけり。極楽寺・高良などを拝みて、かばかりと心得て帰りにけり。さて、かたへの人にあひて、「年ごろ思ひつること果たし侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけり。そも、参りたる人ごとに山へ登りしは、何ごとかありけん、ゆかしかりきど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず」とぞ言ひけり。

〔徒然草〕 5

(注) ○石清水 京都府八幡市の男山の頂上にある石清水八幡宮。付属の寺社である「極楽寺」「高良」は、男山の麓にあった。

問一 □ A～Cの助動詞の正しい活用形を記せ。

□ A □ B □ C

問二 傍線部 a～dの助動詞について、その終止形と文中での活用形を、それぞれ答えよ。

a b c d

問三 傍線部 e「ず」と同じ助動詞が、本文中にもう一つ別の活用形で用いられている。その部分を、その助動詞を含む一文節で抜き出せ。

問四 波線部を現代語訳せよ。

1

POINT

問一 下の語がどういう接続をする語かを考える。また係り結びにも注意すること。

- A 文末にあるが、係助詞の有無にも注意。
- B 接続助詞「ど」に接続していることから考える。
- C これも文末にあるが、係助詞の有無にも注意する。

問二 下にどのような語が来ているかを検討する。

- a 助動詞「けり」は何形に接続するか。
- b 形式名詞「こと」の上は何形になるか。
- c 文末にあることに注目。
- d 下の「に」は格助詞。

問三 「ず」は未然形接続。本活用だけでなく補助活用もある点に注意。意味は打消「～ない」。

問四 「か」「けん」に注意して訳す。この箇所は挿入句。

2

POINT

「めり」の訳と「なり」の識別。

② 次のA・Bの傍線部①～③を現代語訳せよ。

A 山かげのくらがりたる所を見れば、螢はおどろくまで照らすめり。〔蜻蛉日記〕

B 男もすなる日記といふものを女もしてみむとてするなり。〔土佐日記〕

① ② ③

③ 次の(1)～(5)の「なむ」は、後のア～ウの「なむ」のどれと文法的に対応するか。ア～ウの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし該当するものがない場合は、エと記せ。

- (1) ことしより春知りそむる桜花散るといふことはならはざらなむ
- (2) 竜田川もみぢ乱れて流るめり渡らば錦中や絶えなむ
- (3) 山風に桜吹きまき乱れなむ花のまぎれに君とまるべく
- (4) ことさらに死なむことこそかたからめ生きてかひなくものを思ふ身の
- (5) 若くて失せにし、いとほしくあたらしくなむ。

ア 花咲かなむ。
イ 花咲きなむ。
ウ 花なむ咲く。

(4) (1)
(5) (2)
(3)

- ① 「めり」の意味に注意する。
- ② 「なる」の上の「す」がサ変動詞の何形かを考えるとよい。
- ③ 「なり」の上の「する」が何形かを考えるとよい。

③ 重要単語

- ◇錦⇨ある光景を錦の織物に見立てた表現。「中」は真ん中の意。
- ◇まぎれ⇨心をそちらに奪われること。
- ◇かたからめ⇨「かたから」は形容詞「かたし(⇨難し)」の未然形。
- ◇いとほしく⇨気の毒で。
- ◇あたらしく⇨もったいなく。

ヒント

- (1) 「ざら」は助動詞「ず」の何形か。
- (2) 「絶え」は未然形・連用形が同型。意味から識別する。
- (3) 「乱れ」は未然形・連用形が同型。意味から識別する。
- (4) 「死」+「なむ」か、「死な」+「む」か。
- (5) 「あたらしく」は形容詞の連用形だが、基本活用である。

ア 「咲か」が未然形であることを踏まえ、「なむ」を識別する。
イ 「咲き」が連用形であることを踏まえ、「なむ」を識別する。
ウ 「なむ」の上が名詞であることに注目して識別する。